

白梅分館10年のあゆみ

～福生市公民館白梅分館10年の足跡～

福生市公民館白梅分館





白梅分館10周年記念誌の発刊にあたって

福生市公民館館長 堀口茂男

公民館白梅分館の入口の上部から、「福生市公民館白梅分館」という手作りの看板が下がっています。この手作り看板は、焼き杉の板で作られた明朝体のデザイン文字で、白樺の枝の上に配置され柔らかい雰囲気を感じさせてくれています。

1985年（昭和60年）に作られたこの看板より以前には、公民館白梅分館と表示してある看板はありませんでした。当時高齢者事業団から白梅分館の管理に来ていただいていた細淵さんの作品ですが、現在でもこの看板が白梅分館の雰囲気を醸し出してくれています。

この「白梅」という名前がついた経緯ですが、当時の市長（故石川常太郎氏）が、「桜は華やかだがぱっと散ってしまう。梅はそれほど華やかではないが散際がしぶといので、梅にしよう」と名付けたとの事で、入口の正面にある梅の木は石川市長の家から寄贈され、運ばれてきたと聞いたことがあります。

白梅分館の位置している場所は福生市内でも古くからの住宅が多く、残り少なくなったとはいえ、しっとりとした雰囲気を感じます。しかし、古い住宅地の中の空き地に最近ではアパート・マンションなどが多くなり、それに伴って10年以上続けて住んでいる人の比率がだいぶ少なくなり、新住民が増えてきたことが分かります。

新たな人の増加は新たな要求を生み、白梅分館もこの10年、積極的に新事業や援助事業に力を注いで来ました。おかげ様で開館以来約30万人の方に利用していただき、新たな体験や感動、そして人間関係を生み出し、公民館分館としての役割を微力ながら果たしてきました。

公民館という施設は自らが学ぶ権利＝学習権を保障していますが、今後は学びたいことを学ぶと同様かそれ以上に、学ばなければならないことを学ぶことができる施設を、そして本当に必要な人が必要な学習の出来る場（例えば外国から帰国してきた日系人などが、生きる上で必要な言葉や知識などを学ぶ場）を目指して、活動を展開していくつもりです。

地域が抱える課題を発見し、解決のために市民としての関わりを考え実践する小さな公民館——白梅分館——を目指していくつもりですので、今後ともご支援をいただけますようお願いいたします。

